

2021年8月23日(月) 15:30-16:30

広島県発表

【研究テーマ】

コロナ禍の今、私たちにできることを考える —保育の何を変えて、何を変えなかったのか—

【発表者】

高橋愛美(認定こども園ハイロスハイマ)、辻明妃(認定こども園西部めばえ)、菅原知恵子(めばえ幼稚園)、佐藤沙織(白ゆり幼稚園)、松中実穂子(こぼと幼稚園)、渡邊美妃(認定こども園サムエル幼稚園)、平田麻奈(千鶴幼稚園)、佃文香(神辺千鶴幼稚園)、渡辺舞(福山りじょう幼稚園)

【指導助言者】濱田祥子(比治山大学現代文化学部講師)

【テーマ設定の理由】

新型コロナウイルス感染症の拡大は、保育の当たり前に大きな影響を与えた。保育者として葛藤がありながらも、子どもたちの健康を守るために変えざるを得ないことがたくさんあった。ただ、コロナ禍の保育を否定することは、子どもの育ちを否定することにもなる。新型コロナウイルス感染症の収束を願いつつ、保育をあきらめなかったことによる子どもの育ちを喜び、改めて保育とは何かということを考えてみたい。

【研究の概要】

コロナ禍で見通しのない状況において、私たちは子どもを第一に考え、できることを実践した。研究会では、複数園と情報交換をしながら、園を越えて子どもの育ちについて考えた。1年が経過し、コロナ禍で変えざるを得なかったこと、それによる子どもや保育者の変化を振り返った。特に行事は多くの変化があった。例年と同じ経験をさせたかったという想いの一方で、新しい子どもの姿に出会い、保護者や保育者同士の対話が増える機会になった。

【発表内容】

以下の項目にしたがって、スライドで写真等を提示しながら、具体的な実践を紹介する。

1. 遊びや行事の変化と子どもの姿

(1) プール

(2) 運動会

2. 保護者との対話

3. 保育者同士の対話

(1) 担任同士について

(2) クラス担任の立場から

(3) 管理職の立場から

4. コロナ禍でも変わらなかったこと

(1) 保護者の声

(2) 管理職の判断

【現在の研究】

コロナ禍を通して、どのような状況にあらうとも、保育は子どもの声を大切にする営みであることを改めて実感した。現在は、自身の保育について、子どもの声に着目してポートフォリオを作成している。お互いのポートフォリオを持ち寄り、他園の保育者とのカンファレンスを実施しながら、実践に還元している。

<ポートフォリオの例>



ポートフォリオの中身

- ◆ 背景
- ◆ 記録
子どもや環境の写真を添付して、その場面での子どもの声（感情や想い、願いなどを含む）を書き込み、それに基づいた保育者自身の考えやアイデアを自由に書いていく。
「見せる」ことを意識せずに、自分の振り返り、計画のためのツールとして活用する。
- ◆ 質問やアドバイス
カンファレンスでもらった意見をメモする。
- ◆ 明日の保育に向けて
具体的な保育実践を書く。